

道元禪師撰『羅漢供養講式文』における舍利供養

桐野好覚

鎌倉期の旺盛な舍利信仰に対する道元禪師（一一〇〇～一二

五三）の態度、及びそれを巡る諸問題に関しては、既に拙稿

『道元禪師の舍利崇用批判をめぐる一考察』（『宗学研究』第四

一号、一九九九年）にて論考を試みた。『正法眼藏隨聞記』卷

二の示衆に見られる如く、得悟をその功德として措定し行わ

れる舍利崇拜・舍利供養を道元禪師は批判する。しかし舍利

供養を全否定しているわけではなく、また『舍利相伝記』に

記されるように、高僧舍利への強い関心も窺われるのであつ

て、舍利信仰に対する道元禪師の距離感の取り方への解釈は

俄には決し難いものがある。本稿では、道元禪師御真筆とさ

れる『羅漢供養講式文』（草稿本・断簡）の第五門「供世尊舍

利」に関して一考察を試みたいと思う。

一

『羅漢供養講式文』は、石川県大乘寺と愛知県全久院に同

一草案本からの断簡が現存する。本文は、羅漢尊者講贊に

続いて

要略有五門矣。一明住所名号、二明興隆利益、三明福田利益、四

明除災利益、五供世尊舍利矣。（春秋社『道元禪師全集』（以下『全

集』と略称）卷七、二八八頁

と記されるように、五門に分かつて供養讚嘆したものである

が、大乘寺本は第一門末尾の頌の前まで、全久院本は第二門

から第四門の冒頭までとなっている。

さて、第一門「明住所名号」にて「法住記云」としてその

名号が明示されるように、本文にて讃えられる羅漢とは十

六羅漢のことである。『法住記』、即ち詳名『大阿羅漢難提密

多羅所說法住記』は、その名を慶友と漢訳される難提密多羅

の所説で、十六羅漢の思想は本書を端緒とするという。

道元禪師が「法住記云」として引用する箇所は、『法住記』

本文ではそのそれぞれの名と住所を別項立てて記されており、

式文の割注に「己上此即依多分住、如是証也」（『全集』卷七、

二九〇頁）と附記される如く、式文においての繁雑さを嫌っ

た抄出・略合と考えられるが、『法住記』はそれらを記すに続けて次のように十六羅漢の住世護法の次第を載せている。

如是十六大阿羅漢。護持正法饒益有情。至此南瞻部洲人壽極短至於十歲。刀兵劫起互相誅戮。仏法爾時當暫滅没。刀兵劫後人壽漸增至百歲位。此洲人等厭前刀兵殘害苦惱復業修善。時此十六大阿羅漢。與諸眷屬復來人中。稱揚顯說無上正法。度無量衆令其出家。

為諸有情作饒益事。如是乃至此洲人壽六萬歲時。無常正法流行世間熾然無息。後至人壽七萬歲時。無上正法方永滅没。時此十六大阿羅漢。與諸眷屬於此洲地俱來集會。以神通力用諸七宝造窣堵波嚴麗高広。釈迦牟尼如來応正等覺。所有遺身軀都皆集其内。爾時十六大阿羅漢。與諸眷屬饒察堵波。以諸香花持用供養恭敬讚嘆。繞百千匝瞻仰礼已。俱昇虚空向窣堵波作如是言。敬礼世尊釈迦如來。應正等覺。我受教勅護持正法。及与天人作諸饒益。法藏已沒有縁已。周今辞滅度。説是語一時俱入無余涅槃。先定願力火起焚身。如火炎滅骸骨無遺。時窣堵波便陷入地。至金輪際方乃停住。爾時世尊釈迦牟尼無上正法。於此三千大千世界永滅不現。（『大正蔵』卷四九、一三頁中〜下）

入滅に際した釈尊から正法の護持を託された十六羅漢とその諸々の眷屬たちは、十歳まで低下した人壽が、刀兵劫の後、漸く百歳にまで増え至ると、世間に顕れ来たつて無上の正法を説く。人壽が六万歳になると、正法は世に流行し七万歳の時、それ以後の仏法弘通の役目を遺身軀都すなわち釈迦の舍利に託して十六羅漢は無余涅槃に入つてしまふ。この時より

正法は永く滅するのだ、と『法住記』は記す。ここに十六羅漢と世尊の舍利との関連を見出すことができるのみならず、『羅漢供用講式文』は多くの部分で『法住記』の記載に基づいていることが窺えるのである。このことは、第二門「明興隆利益」および第三門「明福田利益」における同書からの抄出・引用からも裏付けられよう。尤も十六羅漢思想自体が『法住記』に端を発するのであるから、その記載に従つて式文が編まれることは至極当然なことと考えてよいのかもしれない。しかし、十六羅漢と世尊の舍利との関連はここに知り得ても『羅漢供養講式文』において「供世尊舍利」として一門設けられるような、積極的に舍利供養をすべしとする所以は、『法住記』からのみでは今一つ見えてこない。

二

残念ながら道元禪師撰『羅漢供養講式文』は断簡である故に、第四門の冒頭部以降を欠いており、第五門の文言は残されてはいない。しかし瑩山禪師（二二六八〜一三三五）の『瑩山和尚清規』巻上「月中行持」に『羅漢供養式』が収められており、その「講式」は道元禪師のそれに非常に近似している。『羅漢供養講式文』は道元禪師自身による修訂・加筆が多く存する草稿本であるが、その修訂前の文言と瑩山禪師の「講式」を比較すれば、若干の言句の相違はあれども、ほぼ等し

いと言える程である。因みに、宝治三年（一二四九）元日に永平寺方丈に於いて羅漢供養が営まれた際の奇瑞を記す『十六羅漢現瑞記』からは、それ迄に羅漢供養が永平寺にて数度営まれていたことが知られるのだが、そこで用いられることなく草稿の段に止まった故に、『鑿山和尚清規』所収の『羅漢供養式』の式文は修訂前のそれにほぼ等しい様相を示すのかもしれない。今は推測を述べるのみとするが、とまれ、鑿山禪師の『羅漢供養式』によって道元禪師の『羅漢供養講式文』における欠損部分の補完は、その修訂箇所を度外視すれば或る程度可能と考えられよう。「供世尊舍利」を明かす第五門を『羅漢供養式』から掲げれば次のとおりである。

第五明供世尊舍利者。羅漢現住世間。護末世人法者。世尊在世昔。懇付屬故也。然託羅漢哀我等。猶廣大恩德也。況遺金剛舍利。利益迷党。豈不報謝乎。双林之暮。流慈愍大悲淚。菩薩声聞付屬我等。五濁之朝留堅固骨舍利。神變利益施作仏事。在世滅後之哀。生身碎身之惠。不可得而称者也。仍為仰無窮之利益。（曹洞宗全書）宗源下、四六一頁上）

この前半部分は、先に見た『法住記』所説の護法の次第に準ずるものであるが、後半部分に記される、五濁惡世に世尊の舍利が仏事を作すという思想は『法住記』には見られない。しかし、世尊の舍利を供養する意義はここに明らかとなるであろう。人寿七万歳に至ると十六羅漢は後の護法の役目

を積尊の舍利に託し無余涅槃に入り、その時より正法は永滅不現となる、と『法住記』は説くが、その舍利が以後仏事をなすという思想が付加され、それが五門中の一門として強調されることによって、「正法の永滅不現」という終末論的色彩合いが払拭されるに至っているのではないだろうか。

三

道元禪師の『羅漢供養講式文』に関して、その撰述には古くより二つの説が存する。一つは瑞長書写本『建誓記』の奥書に記される栄西撰述説であるが、それを確認する為の資料はほぼ皆無に等しく、論証に至らないので今は置く。もう一つは面山瑞方（一六八三〜一七六九）が『洞上僧堂清規行法鈔』巻五（曹洞宗全書）清規、二〇五頁下）に指摘する、明恵（一七三〜一七三三）の『四座講式』からの略合説である。原田弘道氏（『羅漢講式考』『駒沢大学仏教学部論集』十一号、一九八〇年）や東隆眞氏（『道元禪師と羅漢講式について』『印度学仏教学研究』三一巻二号、一九八三年）は、この面山の指摘に対して慎重な態度を示す。即ち、その組織・構成等に共通点を見出し得ても、文章表記が大幅に異なっているからである。しかし『羅漢供用講式文』と『四座講式』は、十六羅漢と世尊の舍利の威徳が等しく賛嘆されるという点で非常に近似した構造を有している。

『四座講式』における「十六羅漢講式」及び「舍利講式」の関連も『法住記』に依拠したものと見る事ができそうである。明恵は『摧邪輪』巻中（『浄土宗全書』巻八、七〇八頁上〜七〇九頁下）に『法住記』の文言（前掲箇所と同じ）を引き「刀兵劫後」という説を支持する。また「十六羅漢講式」にも『法住記』からの引用が、『羅漢供養講式文』のそれと同様に、同箇所より行われている。それでは「舍利講式」ではどうか。「舍利講式」の第一段「総讚舍利功德」には、次のように『悲華經』巻七、諸菩薩本授記品第四之五（『大正藏』巻三、二二頁上）からの取意が載せられている。

悲華經中説舍利利益。三災劫末時。為琉璃宝珠。從金剛際出。上至阿迦尼吒天。雨種種花。当其雨花時。復出種種微妙音。空声無相声無作声等。作如此仏事。令無量無辺衆生於三乘中令得不退転。乃至於五仏世界微塵數大劫中亦復如是。（『大正藏』第八四、九〇五頁上〜中）

ここに、世尊の舍利が仏事を作すという説の根拠を見る事ができよう。坂東性純氏は「明恵上人の釈尊観」（『大谷学報』五八巻二号、一九七八年）において、『摧邪輪』巻中（『浄土宗全書』巻八、七二頁下〜七二四頁上）にも引かれる『悲華經』の記述が、明恵の舍利観の中核を成しており、「舍利講式」にそれが反映されていることを指摘する。道元禪師の『羅漢供養講式文』にも同様の指摘は可能と思われる。『悲華

經』諸菩薩本授記品に語られる宝海梵志の「五百誓願」は、中世における釈迦如来信仰、就中、舍利信仰の大きな後ろ盾であった。道元禪師も『正法眼蔵』に『悲華經』の文言を引用しており、その周辺に関しては既に論考を試み（『正法眼蔵』に引用される『悲華經』と『釈迦如来五百大願』について）『曹洞宗研究員研究紀要』二九号、一九九八年）、そこに对浄土思想的な思考が存する可能性について触れたのだが『法住記』の「刀兵劫後」の思想に、世尊の舍利が仏事を作すという『悲華經』の説を折合せせることで、「正法の永滅不現」の見解を超克しようとするかの如き『羅漢供養講式文』の構成を見ると、末法思想を否定せんとする姿勢をここにも窺い知ることが出来るように思えてならない。『四座講式』と『羅漢供養講式文』との関係については、その思想的構造を対比させながら、今一度論ぜねばならないであろうが、紙数も尽きた故、機を改めて考察を述べることにし、本稿を結ぶ。

（細註略）

（キーワード）十六羅漢、舍利、道元、明恵、『法住記』、『悲華經』
（曹洞宗総合研究センター研究員）